高校時代

susabi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
高校時代

【Ｎコード】
Ｎ６２２９Ｃ

【作者名】
ｓｕｓａｂｉ

【あらすじ】
バスケットに明け暮れた高校時代。そんな自分にも映画が作れた。青春の真っ只中を駆け巡る高校生活。

第1話

高校は親の転勤で大阪の高校へと進学しました。岡山でのんびり過ごした私には、そこは眩しい大都会でした。田畑の間を自転車で中学校に通っていた私にとって、毎朝、満員の電車に乗って通学しようとは思いもよらぬ生活です。しかも自分の進む高校がどんな学校であるかということなど、親が調べてくれたわずかな情報以外に岡山では知ることも出来ませんでした。

府立高校なので、岡山のいわゆる普通の公立高校と大差は無いだろうと思っていました。入学してみてびっくり。そこは音楽とスポーツが盛んで中学時代にその分野で活躍した人たちが集まってきていた学校なのです。そうじゃない人たちは別の普通の学校を選んでいます。

この学校のメインイベントは年末の音楽祭。授業で音楽を選択した生徒達が華々しく舞台に立ちます。高校でも文化祭に命を注ごうと意気込んでいたのですが、どうやら他の生徒達の目的は音楽祭だったようです。しかしそんな舞台があるとは入学したばかりの私は知りませんから、当然選択授業は美術を選びます。美術を選ぶ生徒がクラスで4分の1も居なかったので不思議には思いましたが、まあ正直言って、音楽より美術のほうが全然好きでしたから、私には選択の余地はありませんでした。

どうも、のんびりとした中学時代と雰囲気が違います。私も中学時代は何でも上手く出来たほうなので多少の自信はありましたが、クラスメイトの経歴を聞いて自分のささやかな自信など吹っ飛びました。ここの生徒はすでに中学時代に特定の分野で大阪を勝ち抜いて来た人たちばかりだったのです。どこぞの私学なら分かりますが、

府立にもこんなところがあったのです。好きで選んだ高校ならともかく、これは大変なところへ入ってしまったと気づいた時にはあとの祭りでした。

この学校で男子が生き抜くためには、体育会系の部活に入るかしか道はありません。もともと女子高だった（それも知らなかったが）ので、女子の発言力が強く、彼女達の嗜好によりスポーマン以外は男子ではなかったのです。

しかしながら、正直こんな超高校級の運動神経ばりばりの人たちと一緒に部活をする自信はありません。ハンドボール部は大阪代表の常連で、野球部はＰＬ学園さえいなければ甲子園目前。その他の部もインターハイは当たり前。体育の先生はハンドボール部の熱血鬼監督。たかが体育の授業もスパルタ方式で、準備体操がうさぎ跳びでトラック一周。目を盗んで立って歩いたのが見つかったらもう一周。準備体操が終わったころには鐘が鳴る。単なる部員の基礎トレの時間だったのです。

それでもまだ事情が分かっていない私は美術部に入って絵を習いたかったのですが、そこに男子はいませんでした。じゃあ演劇部でもと思って訪ねたら、なぜだか男子禁制でした。

続く

第2話

「郷に入れば郷に従え」あんまり好きな言葉ではないが、運動部に所属した。いままでこれといった運動もせずに幼少期をすごし、体育に関しては平凡な人間であったから、自分から積極的にスポーツをしたいなどとは思わない青白い少年であった。中学時代に少しだけかじったことがあったのと（すぐにやめたというです）、背が高かったので、しつこく勧誘され、バスケットボール部に入部した。

当時はまだ「マイケルジョーダン」や「スラムダンク」などは流行ってなかったので、人気のない穴場の運動部であった。それでも何年か前に大阪代表で全国大会に出場し、そのときのＯＢたちが練習を指導していた。当時は運動神経のいい野球経験者なども高校からバスケに転向したらしいが、野球部が強くなってきて人材が流れ、バスケ部は人集めさえ苦労していた。秋の文化祭で映画を撮るという夢はまだ抱いていたが、これにバスケットが加わっても何とかなるだろうと思っていた。この高校は夜間部も併設していたので放課後の練習時間は一時間半と意外と少なく、自分の時間は確保できると思っていた。

ところが部活に入ってみて驚いた。早朝練習、昼連、放課後と一日３回もコートに立たされた。しかも一年生はその前後に雑巾がけやボールの準備をしなくてはならない。どこの部も同じだ。音楽系のコーラスやブラバンも同じだけ練習するので、女子も例外なく弁当は授業中に食べた。おしゃべりで授業を妨害されるよりも食べながらのほうがみんな黒板を見るので、先生も特に文句は言わなかった。放課後は早々に帰宅して風呂に入って眠らなければ身が持たなかった。水曜ロードショウの水野晴夫にも日曜映画劇場の淀川長治にも会う元気は残っていなかった。

さらに毎日のように鬼監督のスパルタ体育授業が待っている。この頃になると準備運動のうさぎ跳びに片足とびやカンガルーも加わった。ハンドボール部全国制覇の野望を抱くこの鬼監督に部活と授業の区別など関係なかった。限られたか時間内で成果を上げるため、目の前にひとりでも部員がいたら全員一緒に鍛えるのである。

水泳の季節になってやっと準備運動から開放されたと思ったら、いきなり１５００泳げという。みんな１５０ｍのことだろうと思って２５ｍプールを３往復して、ヨロヨロと上がってきたら、あと２７往復も残っていた。「先生もう限界です。体が持ちません。これ部活じゃないんですよ」と耐えかねた生徒がいったら「勝手に限界を決めるな、倒れた時が限界や！」と本気で怒鳴りつけていた。

子供のころに漫画で梶原一騎の「巨人の星」や「あしたのジョー」を読んで、その描写力の巧みな「川崎のぼる」や「ちばてつや」に興味をもっても、星飛雄馬や矢吹丈に憧れるような人種ではなかった。スポ根は別の世界の物語であったのが、自分がその真っ只中に置かれてしまったのだ。

日曜日は毎週練習試合。同じ一年生でも上手い者はベンチに入って交代要員で試合にも出ていた。私は試合ではコートにすら入れなかった。体育館の２階から声援を送る係りであった。何をやっているんだろうか、と悩む暇もなく、来る日も来る日も練習の日々である。過度の疲労は思考力さえ奪ってしまう。練習を仮病で休むと次の日は体が動かなくて余計に辛かった。毎日運動し続けることが一番楽な方法であったのだ。

憧れだった高校生活最初の文化祭のクラスでの出し物は「人形劇」。２，３日前に用意した、市販の指人形で、「狼と３匹の子豚」を一

回やった。そして、あまりにも自分達の幼稚さにあきれて一回で上演をやめてしまった。そして私には、映画を企画する気力は無かった。ましてや、人を指揮して何かをまとめようなどという自信は微塵も無くなっていた。プロでもアマでも映画の監督をするというのは、揺るぎ無い自信と信頼がなければ成しえないものである。

中学時代に映画を撮れたのはクラスメイトの信頼を得るだけのタイミングがあった。その年私は岡山の中学から丸一ヶ月アメリカにホームステイにいった。今ではよくある話であるが、当時はアメリカに渡るためにはホノルルかアンカレッジを経由しないと飛べない時代であった。そんなときに一人でアメリカの広大な自然の中で過ごした経験は、学校でも評判となり、自分自身を大きく成長させていた。

その経験も自信も、この大阪では平凡な出来事に過ぎなかった。ピアノを弾いてる女の子は、幼いときからヨーロッパに学びに行っていたし、野球少年たちは中学時代にアメリカでの親善試合に出場していた。

この高校の文化祭は演劇部が仕切っていた。彼女らの舞台が全てだった。白い面をかぶった個性的な創作劇で、これを目当てに学外からも観客が集まってくる。顔を隠した彼女達は大胆であった。これが同じ高校生とは思えないような大人びた体を、その演技のなかで見せつけた。はじめて女性の体が美しいと感じ、男子禁制の理由を理解した。

続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6229c/

高校時代

2010年10月18日21時59分発行